

# 社会発展論研究序説

友枝敏雄

本論文は、19世紀以来の社会学のメインテーマである社会発展の理論の現代的構築をめぐったものである。全体の構成は、序論が社会発展論研究の方法の設定であり、第1章が社会発展論の学説史の展望であり、第2章第3章第4章が歴史の理論化を目標とする社会発展の理論の構築であり、第5章が実証研究としての日本の近代化の分析である。目次は以下の通りである。

## 序論

### 第1章 社会発展論の理論的系譜 — 三つの源泉 —

#### 第1節 進化論

- 1 ダーウィンの生物進化論
- 2 スパンサーの社会進化論

#### 第2節 唯物史観

- 1 マルクスによる唯物史観の形成
- 2 エンゲルスによる唯物史観の補足

#### 第3節 近代社会の解剖

- 1 テンニエスの社会発展論
- 2 ウェーバーにおける前近代と近代

### 第2章 進化論の現代的意義

#### 第1節 ダーウィンとラマルク

#### 第2節 現代の進化論

#### 第3節 進化論の有効性

#### 第4節 生物進化論と社会進化論

#### 第5節 進化の二側面

#### 第6節 進化論と機能主義

### 第3章 変動理論と社会発展

#### 第1節 社会変動と社会発展

#### 第2節 発展と機能評価

- 1 ニつの判断基準
- 2 第一次的判断基準

(\*)

#### 第3節 社会発展と近代化産業化

#### 第4節 産業化論近代化論の先駆形態

- 1 サン・シモン
- 2 スパンサー
- 3 テンニエス

#### 第5節 近代社会の特質

- 1 伝統と近代
- 2 近代性
- 3 近代社会の特質
- 4 近代社会の基準

#### 第6節 近代化過程

- 1 近代化過程
- 2 近代化の類型

#### 第7節 近代社会と発展段階

- 1 歴史的欲求
- 2 一般的発展段階

### 第5章 日本への近代化

#### 第1節 社会発展論と日本の近代化

- 1 日本への近代化への視察
- 2 後進国近代化と社会発展

#### 第2節 日本的特殊性

- 1 環境
- 2 規範意識の欠如

#### 第3節 明治維新

- 1 明治維新の位置づけ
- 2 明治維新の意義

#### 第4節 明治維新の対外的条件と対内

- 3 第二次的判断基準
- 第3節 発展の論理
  - 1 発展の原動力
  - 2 発展の潜勢力 発展の可能性  
必要性
  - 3 発展の類型
- 第4節 発展の段階
- 第5節 発展と法則性
- 第4章 社会発展・近代化・産業化
  - 第1節 社会システムの構造
    - 1 社会的行為
    - 2 社会システムの内部構造
    - 3 社会システムの環境
  - 第2節 社会システムと社会発展
    - 1 社会システムと構造変動社会  
運動
    - 2 社会発展と社会運動
    - 3 社会システムの発展過程

(→\*)

- 的条件
  - 1 対外的条件
  - 2 対内的条件
- 第5節 明治維新と産業化
  - 1 日本の産業化
  - 2 日本の産業化と近代化
- 要約と結論
- 参考文献

序論では、社会発展論の準拠点として次の三点を示しておいた。

- (1) 歴史の理論化 社会発展論は社会学と歴史学との共通のテーマである。社会学的方法と歴史学的方法との違いは、社会学が実証的な歴史学の基礎となる一般的枠組を提示しようとする点にある。社会学は一般を志何し、法則定立的(nomothetic)であるのに対して、歴史学は特殊を志何し、個性記述的(idiographic)である。社会発展論への社会学の寄与は、歴史を理論化しようとする点にある。
- (2) 進化的視角のパーパス 変動、発展や歴史の流れを捉えるための視角である。進化的視角は発展論的視角として社会発展論に包摂される。
- (3) 構造機能主義の変動理論 構造機能分析の形跡は、社会変動論への構造機能分析からのアプローチを可能にしている。

進化的視角と構造機能主義の変動理論は、第一の準拠点である歴史の理論化における社会学的方法の内容を示している。社会発展の理論は、進化的視角と構造機能主義の変動理論との統合の上に構築されるものである。

第1章では、社会発展論の三つの源泉である進化論、唯物史観、社会学第二世代による近代社会論を、理論構想の媒介過程としてとりあげた。進化論は、発展論的視角をはじめ理論的に定式化したものである。生物進化論としてダーウィンの進化論を、社会進化論としてスポンサーの社会進化論を考察した。ダーウィン進化論は生物の進化の説明であるが、その進化の論理は、一般性普遍性の程度が高く今なお検討に値する。特にダーウィン進化論が進化という現象を無矛盾に説明していること、理論に要求される論理的整合性と経験的妥当性とをわねをえていることは

注目される点である。進化論を生物有機体のみならず、無機体および社会にまで拡大したものがスポンサーの進化論である。スポンサーによる進化論の展開は、進化論の有効性とともにその射程を明らかにしている。進化論は、有機体と社会とに有効な理論である。マルクス、エンゲルスによる唯物史観は、社会発展についてもっとも体系的な仮説を提出している。弁証法にもとづく発展の論理や発展の段階は社会発展論の古典的形態である。唯物史観は生産力史観と生産関係史観とを生み出す契機を載しているが、歴史の理論化のためのきわめて示唆的な内容を有する。社会学第二世代の近代社会論は、前近代社会に対する近代社会の独自性についての社会学的分析であり、近代化論の先駆形態でもある。本論文でとりあげたテンニエス、ウェーバーは、近代社会の分析を通じて社会発展についての社会学的統合をなしてあげている。特に、ウェーバーは、前近代(伝統的支配)と近代(合法的支配)との比較によって、唯物史観の克服を意図しており、歴史社会学の可能性の方向を提示している。人類史の発展段階における近代社会の位置づけを考えろにあたっては、テンニエス、ウェーバーの所論を生かしていかねばならない。

第二章では、進化論的視角を発展論的視角として捉え直した。ダーウィン進化論と、遺伝学の急速な進歩とに支えられた現代の進化論をあとづけた後、進化論の論理の発展論への適用を考究した。進化も発展も一方向的不可逆的過程である。不可逆的とは変化が累積的(cumulative)であるということである。進化論も発展論も不可逆的な時間概念の上に構築さるべきものである。生物進化と社会発展との違いは、ヒトのユニークさである道具の使用およびコトバの使用にもとづく。生物進化は、遺伝情報によって制御された身体内的生物的進化であるのに対して、社会発展は、文化情報によって制御された身体外的文化的発展である。文化情報は伝達可能であり、文化の伝播(diffusion)は社会発展の重要な契機である。文化が伝播した社会は、外来要素と自生的要素とを「交雑」することによって、より高次の社会になっていく。そのさい、発展に不必要な過渡形態を省略することもできるから、遅れて発展する社会は、先に発展した社会と必ずしも同じ発展のコースをとらぬ。

進化には特殊進化の側面と一般進化の側面とがある。特殊進化とは、一定の枠組の中で生物が環境に適応していくことであり、一般進化とは、枠組そのものを変更し、より高等な生物になっていくことである。特殊進化一般進化の別は、従来の進化論における小進化大進化の別に相当する。特殊進化一般進化には、特殊進化した生物ほど一般進化の力が弱くなるという関係がある。たとえば、バクテリアは高等動物が出現した後も、特殊進化していったからこそ現在まで生存することができた。しかしバクテリアには、より高等な動物になるという一般進化の力はない。生物進化同様社会発展においても、適応しすぎた特殊化した社会はそれ以上発展できなくなる。生物であれば進化の「袋小路」に入ってしまうが、社会では文化の伝播が可能である。文化が伝播した周辺地域の中で発展の潜勢力をもつものが、新たな発展をとげていく。これらが周辺革命説、周辺文化移行説として説明されていたものは、社会発展論によって適切に説明される。発展が地域的に不連続であること、発展を先に行なう社会が必ずしも有利ではないことが社会発展の特徴である。後進社会が

必ずしも不利でないということも、後進社会は先進社会を参考にしつつ発展を行なうから有利な面もあるということである。これは、社会発展における「歴史的後進性の特権」と言われるものである。社会発展の特色をふまえるならば、社会発展には単線的発展の段階はない。社会発展の段階は一般進歩に対応する一般的発展の段階として構想さるべきものである。

第3章では、構造機能主義社会理論の理論的研鑽をうけついで、社会変動、社会発展を次のように定義した。社会変動とは、社会システムの要件充足状態が変動する過程であり、社会発展とは、社会システムの要件充足状態が高められていく過程である。構造機能分析の原理には、均衡原理(相互連関論的アプローチ)と許容原理(要件論的アプローチ)とがある。社会変動、社会発展の定義は要件論的視角から行なったものである。社会変動には、水準変動-構造変動 共時態的変動-通時態的変動 内生変動-外生変動の三側面がある。第一に水準変動とは量的側面の変動であり、たとえば人口の増減とかGNPの増加という現象である。構造変動とは質的側面の変動であり、たとえば組織や制度が変動することである。第二に、社会変動を時間的側面において考察すると、共時態的変動と通時態的変動とがある。システムには共時態(synchronic)と通時態(diachronic)とがある。共時態とは構造変動を生じない仮想的なシステムのことであり、そこには共時的な時間が流れている。通時態とは構造変動を生ずる仮想的なシステムのことであり、そこには通時的な時間が流れている。共時態的変動とは構造的要素が不変の変動であり、通時態的変動とは構造的要素が変化する変動である。共時態的変動、通時態的変動は、それぞれ水準変動、構造変動に対応する。第三に、社会変動を空間的側面において考察すると、内生変動と外生変動とがある。内生変動とは、システム内の要因によって惹起される変動のことであり、外生変動とは、システム外の要因によって惹起される変動のことである。共時態的変動-通時態的変動は、水準変動-構造変動に対応するから、社会変動には、実質的には、水準変動-構造変動 内生変動-外生変動の二側面があることになる。社会変動同様社会発展にも、水準変動による発展-構造変動による発展、内生変動による発展-外生変動による発展、の二側面がある。

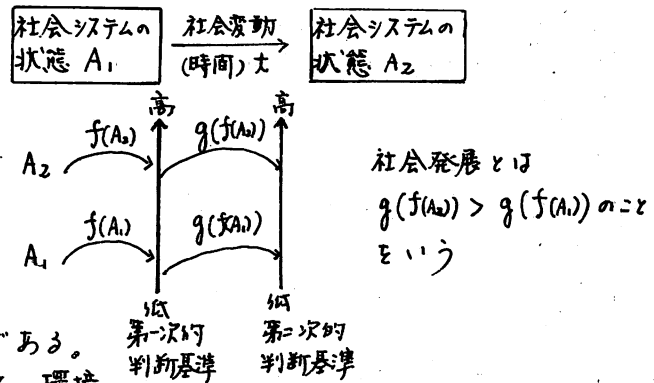
社会変動後の社会システムの状態が以前よりよくなっていれば、社会システムは発展したと考えられる。社会システムの状態を判断する基準として、第一次的判断基準と第二次的判断基準とを考えた。第一次的判断基準は、歴史貫通的(transhistorical)な尺度にもとづいて社会発展の事実判断を行なう。第二次的判断基準は、歴史的(historical)な尺度にもとづいて社会発展の規範的判断を行なう。社会システムの活動は人間の労働過程であり、情報資源処理の過程であるから、第一次的判断基準はこのように人間が自然に働きかける過程にそくして考えられる。自然界の構成要素は、物質、エネルギー、情報からなる。第一次的判断基準として、これら三つの構成要素に対応した、工業技術指向量、エネルギー消費量および利用効率、エントロピーを考えておいた。第二次的判断基準は、社会システムの価値体系にもとづく。歴史的欲求ということもできる。社会発展は、各歴史的段階に対応する社会システムの構成員の欲求を充足し、さらに次段階の高次の欲求の実現をめざして社会システ

ムを高度化していくことである。第二次的判断基準は歴史的な尺度にもとづくから、必ずしも客観性をもたない。しかし、科学の進歩は累積的かつ不可逆的であるから、ある時代の価値体系はそれ以前の時代の価値体系よりも、より多くの科学的知識を基礎として成立する。新しい時代の価値体系ほどより客観性をもつていくのである。したがって、第二次的判断基準は時代に規定されつつも、時代とともに客観性を増大させていくから、社会発展の普遍的な判断基準となるのである。

表 3.1

第一次的判断基準	第二次的判断基準
工業技術指向量	当該社会システムの価値体系 (歴史的欲求)
エネルギー消費量	
利用効率	
エントロピー	

図 3.2



発展の原動力は、環境と技術とである。もっぱら自発的発展の原動力として、環境と技術とをあげておいた。環境とは、人間および社会をとりまく生態系 (ecosystem) 自然システムである。環境は社会発展の制約条件としてほたらくものであり、各地域の社会発展の個別性特殊性を説明するものである。技術とは、科学的知識が生産手段に体化されたものである。技術はヒトが道具を使用したことにはじまり、労働過程を支える。社会発展は、社会システムが環境への適応能力および環境の制御能力を増大させていく過程であり、技術は社会発展において環境を主体化し、主体を環境化する手段である。科学および技術の伝播は、地域文明をこえた普遍的な世界文明を成立させる。技術は社会発展の普遍性一般性を説明するものである。

発展の潜勢力とは、生物の一般進化に於て社会の一般的発展をなしてあげていく力である。つまり、社会システムの内生的要因と外生的要因とを結合させ、社会発展を推進していく力である。内生的要因は社会発展に必然的性格をもたらし、外生的要因は偶然的性格をもたらし、内生的要因は客体的要因と主体的要因とからなる。さらに客体的要因は発展の可能性と発展の必要性とからなる。発展の可能性は発展の原動力たる環境および技術によって規定される。たとえば、エネルギー消費量と利用効率とを高めることができると予想されるならば、発展の可能性はあることになる。発展の第一次的判断基準は発展の可能性を表示するものである。発展の必要性は社会システムの価値体系によって規定される。システムの成員が満足していれば、発展の必要性はなくなり、社会発展は起こらない。発展の第二次的判断基準は発展の必要性を表示するものである。

発展の可能性必要性の水準は、図 3.4 のようになる。環境および技術は社会システムの活動を根底的に規定するものであるから、発展の可能性はあるかないかのどちらかである。発展の必要性の水準は社会システムの構成主体によって主観的に決定されるから、時代とともに変わり、連続的に考えられる。充足軸と許容軸と

によって、必要性の水準を考慮している。表3・5の通り、社会発展は発展の可能性と必要性とがある時におこる。必要性の水準が充足非許容状態の場合には水準変動中心の社会発展となり、不充足非許容状態の場合には構造変動中心の社会発展となる。発展の主体的要因をも考慮するならば、社会発展は、客体的要因と主体的要因との結合によっておこるといことになる。

図3・4 発展の可能性・必要性の水準

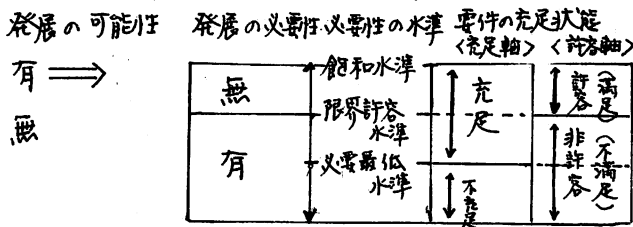


表3・5 発展の可能性・必要性と社会発展

発展の可能性	発展の必要性	社会発展	
無	無	無	没落・停滞
有	無	充足許容	現状維持
有	有	充足非許容	水準変動中心の発展
有	有	不充足非許容	構造変動中心の発展

社会変動の二側面、構造変動-水準変動 内生変動-外生変動にそくして、表3・6のように、社会発展を類型化した。

表3・6 社会発展の四類型

	水準変動	構造変動
内生変動	(1) 水準変動 主導型 内生変動	(3) 構造変動 主導型 内生変動
外生変動	(2) 水準変動 主導型 外生変動	(4) 構造変動 主導型 外生変動

表3・8 発展の可能性・必要性・主体性

発展の可能性	発展の必要性	発展の主体性
発展の原動力 (環境・技術)	要件の充足 状態・許容 状態	発展推進主体
客体的要因		主体的要因

四類型の歴史的事例

- (1) イギリス資本主義の興隆
- (2) 西欧諸列強による植民地支配
- (3) フランス革命
- (4) 中国革命 日本明治維新

第4章では、第3章でマクロに捉えた社会発展を、社会構造にそくしてミクロに捉え直し、社会発展と近代化との関係、近代社会の意義を明らかにし、一般的発展段階の提示を試みた。社会システムの構造の分析の出発点として、まず社会的行為が考察されねばならない。行為理論の現在における到達点をふまえた上で、社会的資源論と充分な対応関係をもつ社会的行為の類型を提出した。社会システムの構造については、パーソンズのいう社会システムの構造的カテゴリー(価値・規範・集合体・役割)や、スメルサーのいう社会的行為の構成素を参考にすると、社会システムの構成要素として、価値、規範、制度、組織、役割の五つが考えられる。社会システムは、制御部門と実行部門とから、あるいは情報処理構造と資源処理構造とからなる。社会システムの活動は、一方では文化的資源(文化パターン)によって制御されており、他方では物的資源によって条件づけられている。図4・1、図4・2に示す通り、社会システムの内部構造は、意思決定過程に対応する政治システム、調整統合過程に対応する調整統合システム、生産過程に対応する経済システムからなる三層構造である。マルクス主義では、実行部門ないし資源処理構造は



(2) 組織 百姓一揆 打ちこわし 労働組合運動における経済闘争至上主義  
 (3) 制度 意思決定過程への参加 たとえば昨今の経営参加や市民参加、権力志向運動とよんでおく。

(4) 規範 価値 革命運動宗教運動などである。体制改革運動とよんでおく。  
 充足非許容状態では、フリーズ、パニック、敵意表出行動がおこりやすく、不充足非許容状態では、構造的緊張があり、権力志向運動、体制改革運動がおこりやすい。  
 構造的緊張とは、社会システムの発展のために構造変動が不可欠である状況をいう。社会運動が発生する中で、社会システムの発展はなされていく。充足非許容状態に惹起された社会発展の典型は、イギリス資本主義の発展であり、不充足非許容状態に惹起された社会発展の典型は、ロシア、日本の近代化である。

社会システムの三つの下位システムのうち、政治システムの変動が構造変動であり、調整統合システム、経済システムの変動が水準変動である。構造変動主導型の社会発展とは政治システムの発展が先行するものであり、水準変動主導型の社会発展とは経済システムの発展が先行するものである。社会システムの発展過程は、三つの下位システムにそくして、表4.2のように類型化される。

表4.2 社会発展過程の類型

経済発展を基軸とする (水準変動先行型)	(1) 経済システム → 統合システム → 政治システム	イギリス資本主義の発展 マルサスの構想 自主管理運動
	(2) 経済システム → 政治システム → 統合システム	先進国における社会主義革命
政治発展を基軸とする (構造変動先行型)	(3) 政治システム → 統合システム → 経済システム	社会主義 中国の社会発展
	(4) 政治システム → 経済システム → 統合システム	ロシアの近代化 日本近代化

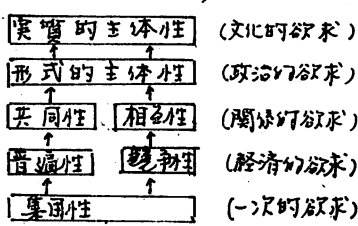
人類史に普遍的な現象である社会発展の中で、特に近代社会成立以後の様々な動きは注目される。近代以後の急激な社会発展を概念化したものが近代化である。社会発展は通歴史的な概念であるのに対して、近代化は近代社会にのみ妥当する歴史的な概念である。近代化は社会発展のスペシャルケースである。近代化とは、急激な社会発展によって社会に近代性が確立されていく過程である、と定義した。近代化の定義における近代性については、サン・シモン、スパンサーの産業革命思想やスパンサー、テンニエスなどの前近代から近代への移行という考え方をあとづけた後で、考究につとめた。とりわけ、テンニエスの自然的(natürlich)と人為的(künstlich)の区別、アタターロ近代社会を、目的手段の選択の問題として、あるいは合理性が貫徹していく過程として把握していたこと、テンニエスを継承した丸山真男の自然に対する作為の論理を正しくうけついで、近代性とは、システムの主体の自由な意思決定のもとに当該システムの活動がなされることであると定義した。個人行為者であれば、個人の自由な意思決定にもとづいて社会的行為がなされることである。たとえば、法的に保障された契約関係や経済外的強制のなくなった個人がイメージされる。つづいて、かなり抽象的に定義された近代性概念の理解を容易にするため、近代社会の特質を、社会システムとその環境、すなわち、文化システム、政治システム、調整統合システム、経済システム、自然システムのそれぞれについて、



具体的に記述した。そして近代社会の時期劃定のための、近代社会の基準について考察した。

近代社会の特質、近代化の類型を一論じた後、近代社会が人類史にどのように位置づけられるかを歴史的欲求と一般的发展段階とを通じて明らかにした。歴史的欲求の構造は、個人の欲求を一次的欲求と二次的欲求とからなることを導きの糸として考えられる。一次的欲求は動物的必要性にもとづくものであり、個体維持の欲求と種族維持の欲求とからなる。二次的欲求としては、経済的欲求、関係的欲求、政治的欲求、文化的欲求を考えておいた。経済的欲求は、労働および富の欲求である。経済的欲求はモノや貨幣の獲得によって充足される。関係的欲求は愛および所属の欲求であり、支配被支配の欲求である。関係的欲求は社会関係をとり結ぶこと自体によって充足される。政治的欲求は自由平等の欲求であり、制度的に保障されねばならぬ欲求である。文化的欲求は自己実現の欲求や遊びの欲求であり、個人の全面的開花をめざすものである。経済的欲求、関係的欲求、政治的欲求が人間的必要性にもとづく欲求であるのに対して、文化的欲求は人間的必要性が充足されてはじめて成立する欲求である。一次的欲求は集団性の契機である。経済的欲求は、労働が人間に普遍的であるという意味で普遍性の契機であると同時に、個人の労働生産物量の違いや労働生産物の稀少性が競争をひき起こすという意味で競争性の契機である。経済的欲求の両義性が関係的欲求の両義性を生み出す。関係的欲求のうち、愛および所属の欲求は共同性の契機であり、支配被支配の欲求は相互性 (reciprocity) の契機である。相互性とはグールドナーの言う意味での相互性である。政治的欲求は関係的欲求の両義性を統合し止揚する。このように止揚をめざすものであるから自由平等の欲求は本来二律背反的である。政治的欲求は形式的主体性の契機である。文化的欲求は実質的主体性の契機である。個人においても社会においても、より基本的な欲求の充足の上に、より高次の欲求が活性化し、社会発展は歴史とともに社会がより高次の歴史的欲求を充足していく過程にほかならない。

図4-11 欲求の階層構造



人類史の一般的发展段階は、技術の進歩および産業の発展にそくして考えられる。人類史は、前産業社会、産業社会、脱産業社会の三段階に区分される。この三段階を更に細分すると、採集狩猟社会、農耕牧畜社会、工業化社会、脱工業化社会、脱産業社会の五段階からなる。一般的发展段階は、唯物史観の発展段階および構造機能主義の発展段階を包摂するものである。唯物史観の誤りは、たとえば古代的段階は封建的段階を経て資本主義社会に至ると、単純的发展段階を強調したことにある。特殊進化したものは一般進化的の力が弱くなるという、進化的発展の命題および社会発展の地域的不連続性という実実を考慮するならば、むしろ農耕牧畜社会段階の多様な類型として古代的段階および封建的段階は考えらるべきである。

表4-7 一般的发展段階

三段階	五段階	技術	歴史的欲求		唯物史観		パーソナル・レベル
	採集狩猟社会	火・道具	個体維持 種属維持	自然への拘束	層出共同体	無階級社会	原始的

前産業社会	農耕殖産社会	産業革命	経済的欲求 ↓ 関係的欲求	動物的必要性の解放 自然からの解放 共同体への拘束	古代社会 封建社会	階級社会	共同体	古代的(封建的) 歴史的(歴史的)
産業社会	工業化社会	産業革命	経済的欲求 関係的欲求の 重層化 「金銭」の革命	共同体からの解放 労働への拘束	資本主義社会		市民社会	近代的 (自由権重視の法体系)
	脱工業化社会	情報革命	政治的欲求 「疎外」の革命	形式的主体性の確立 人間的必要性の	(社会主義)社会			後期近代的 (社会権重視の法体系)
脱産業社会		?	文化的欲求	らの解放 実質的主体性の確立	共産主義社会	超階級社会	共同体的市民社会	

第5章では、まず日本近代化への視察の確立のため、第3章第4章で展開した諸類型によって日本の近代化を位置づけてみた。

発展の類型 構造変動-外生変動主導型であること。日本の近代化は不充足非許容状態に惹起された社会発展である。

発展過程 政治発展を基軸とする発展過程。日本の近代化過程はロシアの近代化過程と類似しているが、社会主義中国の社会発展の過程とは幾分異なる。

近代化の類型 近代化の第三類型であること。日本の近代化は後進国近代化の一つの典型である。

日本の近代化は江戸末期より明治政府の成立を経て今日に至る社会発展の過程である。日本の近代化分析という場合、一世紀以上にわたる日本近代史を祖上にのせねばならぬが、本論文では日本近代化分析の出発点として明治維新期の分析にとどめた。日本の近代化は日本社会に社会発展の潜勢力があればこそ可能になった。発展の潜勢力のうち、特に内生的要因に注目しながら明治維新の分析を進めた。

内生的要因の中心たる発展の原動力のうち、まず環境を自然的条件および日本人の風土的性格の視察から考察した。自然的条件としてウェーバーの森林耕作、治水耕作の別を援用するならば、日本は治水耕作でもなく森林耕作でもないが、中国に対しては、いわば西洋の位置にあった。このことは、中国の近代化に比べて日本の近代化に有利な状況をもたらした。風土的性格としては、寛容的忍従的性格や規範意識の欠如が考えられる。規範意識の欠如は日本思想史で言われる「理念の雜居状況」とも関連している。これらの風土的性格は「家」原理にもとづく全体性の自覚と結合することによって、明治政府の成立に有効に作用した。次に技術は、江戸期の技術水準を明らかにするものとして、肥後(熊本県)矢部手永総庄屋布田保之助の通潤橋という眼鏡橋水道橋架橋の事業をとりあげた。眼鏡橋は九州地方に偏在するため、その意義が過小評価されているが、本論文で述べておいたように、最近やっと脚光を浴び我々の祖先の残した技術的遺産として注目されるようになった。科学の制度化されていらないことが日本近代化の自生的発展の道をとびしてしまっただけで、江戸時代には科学技術はかなり発展していたし、さらには社会発展における最低限の基盤を創出していた。それ故、開国以後の西欧との対峙の中で急激な近代化の推進が可能だったのである。

外生的要因としては、第一に当時極東進出に努力を集中できた欧米諸列強はイギリスだけだったこと、第二に日本が中国よりも更に極東に位置していたことが考えられる。これらの外生的要因は日本への西欧諸列強の圧力を相対的に弱めさせ、また日本の開国を中国よりもさらに遅らせることを可能にした。結局、外生的要因は西欧の強制下になされた社会発展であるにもかかわらず、日本の近代化を一層成功に導くものであった。

日本の近代化の根幹たる産業化に新たな視点を提出すべく、紡績資本形成期の綿紡績業、とりわけ大阪紡績の果たした役割について簡単に考察した。まだまだ不十分であるが、日本の産業化が後進国産業化の一類型であることは明らかになった。

従来日本の近代化については、西欧近代市民社会の生成過程との比較を通じてその意義が明らかにされてきた。明治維新がブルジョワ革命であったか、それとも絶対主義政府の成立であったかという周知の論争も、西欧モデルとの比較によって始めて可能となった。しかし理念型としての西欧モデルの強調は西欧モデルに適合しない部分を夾雑物あるいは社会発展に本来不必要なものとして理解する傾向が強いのではなからうか。その結果、日本の近代化を歪められた近代化として捉えるのが、これまでの日本の社会科学の伝統であった。日本の近代化は西欧先進諸国の社会発展の過渡形態を省略する形でなされたから西欧の近代化のコースとは異なる道をたどった。また短期間に急激になされたから近代国家成立以後も前近代的要素が多分に残存していた。しかし、近代化が世界に伝播し世界文明が成立した今日、西欧を近代社会の唯一の理念型とする視点はどこまで有効であろうか。いかなる社会も一般的発展段階をたどるものであるが、各段階への移行のしわがたの細かな差は社会によって異なる。そもそも、近代資本主義は西欧の近境イギリスに勃興したのであって、典型的封建社会であったフランス、ドイツに勃興したのではない。日本の近代化を論ずる場合にも、戦前における伝統的要素前近代的要素の問題やナショナリズムの昂揚に伴う対外膨張政策は看過してはならぬ。高度経済成長を経て一定の生活水準の上昇を経験した1970年代においては、これらの問題も戦後の社会発展を射程に入れたいうで論じられねばならぬであろう。されば、日本の近代化は、西欧の近代化のコースと異なるが、歪められた近代化というよりも、むしろ「歴史的後進性の特権」を生かした、すぐれた後進国近代化の典型であると考えられるのである。日本の近代化は多くの人々の主体的営為が結実したものである。

日本の社会科学において、マルクス主義からのアプローチによる日本資本主義経済史以外には、日本近代史の理論化を試みたすぐれた業績はないように思われる。社会発展の理論の一層の彫琢と社会発展論による日本近代化の分析とは、筆者の今後の課題であると同時にこれからの社会学の課題でもあろう。

(ともえだ としお)